

大火と函館商人の 進取性が生んだ「街」

歴史都市のおもしろさは、町がたどってきた時の流れが、建物や街路の細かなつくりの変化に堆積し、それを足と目で読みとっていくところにある。函館のような港町であれば、海や坂、山が加わって、一層くっきりと目に映えてくる。

函館は北海道への玄関口であり、日本が近代へと踏みいった歴史の玄関口でもあった。いまは内陸部へ大きくひろがった函館市だが、その原点は函館山麓の西部旧市街にある。旧市街の中央にひととき幅広く通された坂道があって、基坂（もといざか）と呼ばれている。「基」は文字通り函館の原点を記念してつけた名称だ。

基坂の下端には、1859（安政6）年、国際貿易港としての開港と同時に運上所、後の税関が設けられた。坂を登りつめたところには、旧函館区公会堂が華やかな姿を見せているが、かつては幕府の奉行所があった。1803（享和3）年、坂道の真正面に建てられた役所である。時代が明治になって、開拓使函館支庁、函館県庁、次いで北海道庁の支庁に看板が変わった。1909（明治42）年に建てられた函館支庁、のちの渡島支庁舎が残っている。いまはあたりが元町公園として整備され、庁舎は位置を少し脇に移して観光案内所になっている。

基坂はこのように幕政時代の函館の原点を象徴しているが、原点ははるか中世にさかのぼる。函

館（昔は箱館と書いた）のルーツは、箱のように四角な館＝城砦だったという。館の位置は基坂の現在の市立病院跡のあたりだったとされている。基坂が通される前は、海べりの下町とは崖でへだてられた高台になっていて、海を見わたす絶好の立地だった。

海べりの道筋はいまの市電通りにあたる。船着き場を背後にして問屋が軒を連ねていた。箱館港町は18世紀末には、松前、江差とならんで「松前の三湊」と謳われた。ただその中心は、古くは岬寄りの弁天町にあったが、少しずつ末広町（昔の町名では内澗町）へ、さらに大正・昭和期には末広町の十字街から現函館駅前一帯へと移っていった。

末広町の旧金森洋物店（1880年／道指定有形文化財）は、このあたりが中心だった時代を代表する。1878、79（明治11、12）年と続いた大火のあと、開拓使の指導で防火造市街の建設が進められた。末広町街路は防火造商家がずらりと並ぶ街並みになったが、同じ防火造でも伝統的な土蔵造りが一般的だった中で、金森洋物店を中心としたこの一画だけは多くがれんが造で建てられた。開拓使がれんがを製造し、その使用を奨励したことを受け入れた、函館商人の進取性がよく表われている。

建物の表面は赤れんがではなく、白漆喰を塗っ